【一薬の魅力㉘西日本唯一の漢方薬学科〈８〉独自科目「臨床漢方治療学」】

２０２５/７/１６公開

西日本で唯一、漢方薬学科がある第一薬科大学で、同学科６年を対象にした独自科目「臨床漢方治療学」が行われました。今回のテーマは「エキス剤の基本と応用」。学生らは西洋医学とは異なる漢方医学の世界を学びました。

この授業では「飯塚病院　漢方診療科」（福岡県飯塚市）の医師らがオンラインで説明。学生らは漢方医学の基本的な考え方や診察方法などを学びました。

今回は久保山友晴教授がエキス剤について紹介。

処方される漢方薬のエキス剤（右の画像参照）にはそれぞれ番号がついていますが、「ツムラ」の研究者が〝独断と偏見〟で決めたそうです。しかも「縁起が悪い」という理由で４や 13、42、49 はないのだとか。「日本人らしいですね」。久保山教授は笑います。デザインは１の位が色、１０の位は線の長さなどを意味していて、さすがに薬剤師国家試験には出ないでしょうが、久保山教授は「（ツムラの関係者は）『誰も気づいてくれない…』と嘆いていたので知っておいてあげましょう」と話していました。

服用方法は「ぬるま湯に溶かしてから飲む」が正解。５年次に「伝統医療薬学実習」を選択した学生は漢方薬にさまざまな飲食物を混ぜて試したので理解していると思いますが、ココアやミロを入れると飲みやすくなります。

西洋医学は症状別に考えるので薬が多くなりますが、漢方医学ではその時点における全身の様子で判断するため、薬の過剰服用を意味する「ポリファーマシー」の問題が解決することもあると指摘。エキス剤は品質が安定しているので安定した効果が期待できる一方、種類が限られているとも話しました。

さらに「（語尾につく文字が）『散』か『湯』では全然違う漢方薬になるので気をつけてください」と注意。久保山教授によると、なかには混乱している医師もいるそうです。そういう事情もあって、医療現場で医師らをしっかりとサポートできる漢方にくわしい薬剤師が必要になっているのです。